



総合科学部 カレンダー '80

〔4月〕

入学式(4月8日)ー今年は県立体育館。オメデトウ。

前期聴講受付(4月12日～4月25日)ー人の多そうな授業はかなり早目に行かないと、あふれて悲惨なことになります。

オリエンテーションキャンプ(4月26日～4月27日)ー宮島で。先輩を知り、友人もできて、最高に楽しい。

〔5月〕

西条研修(5月24日～5月25日)ー西条の研修センターで1泊する。チューター単位、コース別で先生方との話し合いの場が持たれる。

春期ソフトボール大会ー総科の教官・事務・学生による大会。賞品も出ますぞ!

〔6月〕

6月祭ー森戸道路への店出し、映画etc…チケットの押し売りなどで売る方も買う方も殺気立つ。

〔7月〕

10日より休み。

〔8月〕

まるまる休み。計画をしっかりと立てて!

〔9月〕

前期試験ー1ヶ月間苦しめられる。あきらめて勉強することですナ。

〔10月〕

試験休み(10月1日～10月14日)ー何とか生きる気力を取り戻しましょう。

前期成績発表ー恐怖は忘れた頃にやってくる。

〔11月〕

大学祭ー広島の中街にアホをさらす時です。ま、何事も参加することに意義があるもの!

秋期ソフトボール大会ー総科の伝統となりつつある大会。事前の戦力調査もさかんです。

〔12月〕

フェニックス駅伝(12月7日)ー体育会主催の呉ー広大間40kmを8人で走るこの駅伝は、学内のみならず広島の名物になっています。

冬期休暇(12月21日～翌年1月7日)ーこれだけは高校並みに2週間。

〔1月〕

共通1次試験ー今年からは、この日は優雅な連休になります。

卒論提出しめ切りー4年後のこの日は、地獄だそうナ。

〔2月〕

後期試験ー一年に2回の苦労日の到来。参加するだけでも意義がある!?

卒業祝賀パーティーー総合科学部全体での卒業祝賀会です。日頃あまりお目にかからぬ4年生の方に、会いに行きましょう。

〔3月〕

春休み(3月1日～4月8日)ー実に貴重な休みといえましょう。

2次試験ー昔を思い出しつつ、合格電報のバイトに精を出すのが一番イイ。

卒業式ー3月25日。さて4年後はいかに?!



『飛翔』は飛べるのか

—『飛翔』紹介—

編 集 部

『飛翔』の創刊は1975年3月15日である。しかしそれ以前に、1号だけの総科の広報委員会の手になる学部報『総合科学』が74年7月に出されている。今日の『飛翔』は、その後「従来一般に学部報なるものが弾力性に乏しい無味乾燥なものに傾きがちで学生の興味をひかないくらい」（『飛翔』No.1編集後記）があるという配慮から、学生が編集に参加していくこととなり、学部報の名称も公募した中から選ばれ『飛翔』と改められたのである。

『飛翔』創刊の辞には、「この『飛翔』を通じて学生・教官・事務官の間のコミュニケーションがより一層深まり、そこに相互の信頼に基づいた学部の創造発展の道がひらかれることを望んでやまない。総合科学部に永遠の『飛翔』あれ／＼」（学生側広報委員）と、あり、文字通り学生・教官・事務官の三者による編集形態を備えた学部報『飛翔』に対する多大の期待となみなみならぬ意欲がうかがえる。

こうした創刊時のバラ色の『飛翔』像をふまえた上で、以下において、学生編集部側から見た現在の『飛翔』像について述べ、その紹介としたい。

『飛翔』も本号で足掛け7年目、15号の発行にこぎつけた。しかしまだ学生への浸透は浅く、先日、79年度の卒業生の方々にアンケートのことで電話した時も、まず『飛翔』そのものの説明で1分間を費やすことしきりであった。果して何故にこうも『飛翔』の存在感は薄いのだろうか。『飛翔』のもつ官報的性格のためか、それとも取り上げる話題が「カタイ」のか「オモシロクナイ」のか……。ともかくも『飛翔』は飛んでなどいない、まだまだ地べたをはいずり回っている雑誌なのである。そこでもっと学生の皆様に喜んで読んでもらえて、その発行を待ち望んでもらえる存在にするためにこうして『飛翔』の紹介を書いているわけである。ではどうするのか。まずリラックスした調子で紹介をはじめようということになった。「カタク」ない紹介なのだ。

前にもふれたが『飛翔』の編集は学生の編集者と学部の広報委員の先生方、それに厚生補導係の事務の方が加わってなされている。学生が各号の企画案を作り、先生方の企画を含めた合同編集会議でその

案を練り、具体的に原稿の依頼や取材、編集等を行うのだ。もちろん、編集段階において学生と先生方、学生間での意見の対立が出てくることは日常茶飯の事である。『飛翔』はだいたい年間3号のペースで作られている。当然、前の号と次号との間に約4ヶ月くらいの空白があって、話題への即応性つまりニュース性に乏しい感がある。6月の出来事を10月頃取りあげるというのだから「人の噂も75日」どころの話ではないのだ。しかし、我田引水的な見方を許してもらえば、『飛翔』は学部の出来事を時と共に忘れ去られがちな一時的な“噂”としてしまうことなく、時間をかけて立場の異なる学生・教官等の各層へ働きかけ意見を収集し、その問題を“記録”することができるのである。たとえば最近に例をとれば、昨年「コース決定問題」に関する記事がある。詳細は『飛翔』14号を参照してもらうことにして、この問題はコースの受け入れ可能数をめぐる論議であったがつきつめて考えると総合科学部のあり方の根本を問う出来事であったと言える。昨年9月に教授会の審議を経て結論が出されたもののいくつかの問題点が残されているように思う。そうしたことを一過性的なこととしてしまわずにその不備な点、今後にもち越された事などを十分に認識し直すことが、今後新たに問題が起った時の対応に生きてくるのではなかろうか。もちろんこれは口で言うほどの「キレイゴト」では片付かない課題である。立場の異なる学生・教官各層の意見を集めると言ってみても、実際には学生の中でも誰がどんな考えをもっているか知ること、取材に協力してもらうこともかなり困難を伴うのだ。ましてや、先生方については学生には認知しえない領域もあるのである。「コース決定問題」においても、教授会の決定という公式的な見解以上のこと、つまり個々の先生方の意見については取材することができなかった。それは責任問題がつきまとい、学生に動揺を与えるような軽々しい発言はなされてはならないとの理由のためであったと思うが、そうした外的・内的な規制が存在する限りこの種の問題においてはその本質を見極めることはおろか、それに迫ることすらも困難になってしまう。教授会による決定が出され今まで不明確だった「コース決定」の基準が明確にされたことは一応の

進歩であると言えるかもしれないが、それで終わりという問題ではないと思うのだが、こう考えるのは筆者だけだろうか。

少々、話が横道にそれた気もするが、かくの如く物事の本質を“記録する”ことは困難な作業なのである。

おっと、いかん、話がだんだん「カタク」なってしまったようだ。皆様の『飛翔』となるにはもっと「クダケ」でなくてはいけない。しかし内容が「カタク」なったついでにもうひとつ忘れてならない『飛翔』の意義について。

それは学生の意見・個人的な研究等の発表の場としての『飛翔』の位置付けであり、それを討論や意見交換として継続させていくことである。ひとつの意見に対して反論とか、批判が出てきてもよい、いや出てくるべきだと思う。記事に対する反応（手応えと言ひ換えてもよい）が、常に期待できなければ『飛翔』の記事はだんだん当り障りのない中間的な意見（見解）しか取りあげられない状況に陥ってしまうことになるだろう。それじゃあ『飛翔』は、作っている者も読まされる者もおもしろくないのどちがうだろうか。まるっきり優等生的な文章で、学部は平穩無事にやっていますと済ませてりゃあいいっ

てもんじゃないだろう。総科には、まだまだ解決し、補わねばならない問題が山積しているはず。学部にとどまらず、大学全体のことも考えれば、統合移転とか、授業料値上げのこと等、学生だって言いたいことがたくさんあるんじゃないだろうか。ところがそれに反して学生が発言したり、学生の意見に出合う場がいかに少ないことか。そんなすべての学生の要求に『飛翔』が応えることはできないにしても、少なくとも総科の学生についてはフォローが可能ではあるまいか。またそういった役割を『飛翔』が担っていかねばならないと思うのである。

ああっ、やっぱり「カタイ」話に終始してしまった。こんな文章を最初にもってくるとまた誰も嫌気がさしてあとの方まで読まないんじゃないだろうか。いやいや、少なくともピッカピカの1年生だけは読んでくれるはずだ。必ずヤル気のある1年生が明日の『飛翔』を担ってくれるだろう。でも、不安はやはりつきまとうのである。

そこで、いつか大空に舞う『飛翔』を頭に描きつつ創刊の辞から次の言葉を引用させてもらう。

“人間が希望に生きられるのは、とめどもない精神の飛翔感によってである。”（学生編集委員一同）

新しい地球社会にむけて

—総合科学部新入生に— 広島大学総合科学部長

式部 久



総合科学部が創設されてすでに6年、諸君で第7回の新入生を迎えることになる。おそらく諸君の多くも、諸君の先輩たちと同様、新しい理念をもったこの学部、それなりの積極的な期待をもって入学してきたことであろう。昨年9月に『飛翔』編集部がおこなったアンケート調査によれば、「なぜ総合科学部に来たか」の問いに対して、回答者の約20%が「新設学部で自分の可能性を試したいから」、約40%が「学際的、総合的研究をしたいから」と答えているという。「コース決定までに1年間猶予があるから」と答えた回答者は

約15%であった。

諸君の積極的な期待のなかには、同時にいくらかの不安がかくされているかもしれない。一般の伝統的な学部の単一的な専攻にくらべて、この学部の場合には専攻の間口が広く、また複合的であり、それだけ多くの努力が要求されるからである。

しかし、学際的・総合的ということ、最初から強く自分に求めなければならぬわけではない、と私は考える。自分の興味や関心の自然な発展に即して、隣接した領域や関連した科目に手をのばしていけばよいのであって、それ以上のものではない。要は、かりに一つのものに集中するとしても、そのことだけに溺れて、他の事柄への関心をうしなうことがないように、たえずより広い視野から問題を問い

なお姿勢をくずさず、そのための訓練を自分に課しておくということであろう。これからの社会において、大学卒業者に期待されるものもまた、そのような広い視野であり、柔軟な思考である。

80年代の幕あけとともに、人類はいよいよ本格的な地球社会の時代に入ろうとしている。しかもこの新しい時代は、必ずしも無条件に明るい展望をわれわれに与えてくれるわけではない。むしろ国際関係の一層の緊張さえ予感されて、「世界は一つ」ということばのもつ美しい語感とは裏腹に、重苦しい緊迫感さえ与えかねないのである。

十数年前のその当時にあっては、中近東諸国の紛争は、一少なくともわが国においては、一遙かな僻遠の地の局地的紛争と見られがちであったが、やがて関係諸国が石油戦略を発動すると、日本経済はたちまちのうちに、世界的規模の石油ショックの渦にまきこまれ、それまでの高度成長の経済は根本的にその性格を変えることを余儀なくされた。それは単に石油資源のみにかかわる問題ではなく、好むと好まないにかかわらず、新しい地球時代の到来を思わせる事件であった。

そしてそれから数年、今度はイラン革命の余波を受けてアメリカが揺れ、日本が揺れている。更に近くはアフガニスタンへのソ連軍の侵攻とその衝撃がある。

もはや現代にあっては、単純に「局地的」といえるものは存在しない、ということであろう。地球上のどの地点の出来事も、他の地域の政治経済の動きと無関係ではなく、一国だけが孤立して平和や繁栄を享受することは、きわめて困難になりつつある。

地球が有限な空間であるということも、新しい地球社会の時代にとって、銘記されなければならないことである。資源問題・人口問題・環境汚染の問題等々、限られたこの地球空間において人類が共存していくために、探究し解決していかなければならない問題は数多い。同時にこれらの問題は、物質文明にひたり切ったわれわれの日常生活に対して、痛切な反省を求めずにはおかない。「豊かさ」の名においてわれわれがひたすら生活圏の拡大をめざし、その結果手に入れたものは何であったか。競争原理に支配された過度な経済成長の追求がどのような結果をもたらすか。

われわれは、こうした形での人間の生き方そのものにかかわる反省をもふまえて、これからの地球社会に明るい展望をもたらすよう、努力していかなければならない。これから総合科学部で学ぼうとする諸君が、そうした問題に広く眼をそそぎながら、一方ではどこまでも自分の個性に即し、適性にかなった仕方、地道にそれぞれの力をやしなっていくことを期待したい。（ヨーロッパ研究・教授）

特集

舟出の時に交すコトバ —卒業生にきく—

その1

「薦めたい講義及び講義に対する意見」

編集部

総合科学部は創設以来、今年で7年目を迎えようとしています。

『飛翔』編集部では、「総科とは何か」という一貫したテーマに基づき、一昨年、昨年に引き続き、今年も卒業生の方々にアンケートをお願いしました。

その内容としては、新入生の皆さんが、これから総科の中で学んでいく為の、又、総科生の意識がどのように変化してきたかを知る為の、ひとつの指標

となるよう、①卒論の一言紹介、②薦めたい講義及び講義に対する意見、③大学生生活を振り返って、④私の学生観・職業観の4つを取りあげてみました。

この意図が充分生かされているかどうかは皆さんの判断にお任せしますが、少ないながら、総科の中で4年間を過ごした人々が何を考え、何に悩んだかを知り、これからの生活の糧として頂ければ幸いです。

薦めたい講義

○専門教育科目

コース	講座・群	教官名	講義題目
地域文化	日本研究	深 萱	日本現代文学研究
	アジア研究	鈴 木	中国文明論
	比較文化研究	水 島	比較文学演習
	”	久 野	比較哲学
社会文化	I 群	清 水	社会人類学演習
	”	今 中	社会思想史
	”	富 井	市民法論 I・II
	II 群	木 本	技術史演習
情報行動科学	人間行動	杉 本	生理心理学
環境科学	II 群	小 此 木	電磁気学演習
	III 群	根 平	植物系統学
	”	武 森	分子生物学
	IV 群	津 端	都市環境学
	”	福 岡	気候学
”	吉 仲	科学史特論	
その他		芝 田	理科教育法

○一般教育科目

講義題目	分野	教官名	薦めたい理由
環境地理学	人 文	福 岡	卒論指導の先生だから。
基礎統計学	社 会	岡 本	今日の情報化社会に於て、諸問題を推定、検定することは大変重要なことだと思うので文系・理系を問わず受講されたい。
化 学	自 然	多 井	地学がいかにか軽視されているかを聞かされると笑いの中にも涙をそそられる。
ロシア語	外国語	米 重	人数が少なく、丁寧な指導で退屈しない。
英 語	”	三 浦	聞く人が聞けば最高に面白いギャグがあります。

○講義等に対する要望，批判

- 社会文化コースの教官に対して—果たして社会文化に於て学問の自由が十分に保障されているのか、疑問を持たざるをえない。学生が自主的活動をすることが推奨されているわけでもなく、寧ろなおざりにされている。例えば学生研究室がいつの間にか演習室に化け、卒論用のコピーは全くできず、高校時代にも劣るお粗末さである。果たしてこれで総合科学といえるのか。もちろん学生自身の自覚の無さも批判しなければならぬ。私はこの両極の矛盾の中で苦闘し、結局殆んど満たされぬままに卒業する。
- いろいろな講義を選択する自由はあって良いのだ

が、縦・横のつながりのある講義体系を確立して欲しい。環境科学実験 I をもっと充実したものにし、もっと時間をとって欲しい。

- 英語の授業を改善して欲しい。3年まで全員を対象に週一回ずつダラダラとやって効果があるのか?
- 講義が広い範囲に渡りすぎている。興味の対象としては良いことかもしれないが、講義が系統的になっていないために、自分の力を身につけにくい。もちろん本人の努力次第ではあるが。
- 講義は聞くものではなく、自らの研究に参考にしていく為の材料であると思うから、講義の良し悪しは個人の生かし方によって決まってくるのであ